



<現代語>から見た「言語の教育」(2):
なぜ<現代語>は開設されないか

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2008-05-21 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 佐野, 比呂己, 比良, 輝夫 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.32150/00005005

〈現代語〉から見た「言語の教育」(2)

—なぜ〈現代語〉は開設されないか

佐野 比呂己・比良 輝夫

はじめに

第6次学習指導要領（1989年告示）では、「言語の教育」としての国語が重視された。その中で、日常生活の言語を取り扱った〈現代語〉注1を大平浩哉氏は「言語教育としての国語科教育のシンボリック的意味、いわば旗手としての役割を担った新科目」注2と位置付けている。また、1987年1月28日付の『朝日新聞』には「高校国語に『現代語』」という見出しが第1面に掲載されている。

この2例を見ても明らかなように、〈現代語〉が内外から大きな期待を受け、誕生した科目であることがわかる。

教育課程審議会の「中間まとめ」や「答申」の中でも引き続き国語科においては「言語の教育」としての立場を一層重視する観点から〈現代語〉の学習内容と重複する部分が数多く見られる。

これらのことから、〈現代語〉の学習内容そのものが「言語の教育」の中核をなし、第7次学習指導要領の、更には21世紀の国語科教育の中核をなしていくことがわかる。

しかし、第7次学習指導要領の高等学校国語科の科目の中には、〈現代語〉の名前はない。

これは、〈現代語〉の学習内容が中学校までに十分に指導されているから消えたわけではない。また、〈現代語〉の学習内容が高校生にとって、不必要だから消えたわけでもない。

〈現代語〉は消えるが、その学習内容は《国語表現Ⅰ》《国語総合》注3の中に再構成されることになっているのである。更に、この2科目のいずれかの履修が必修とされている。要するに、今まで選択科目でしかなかった〈現代語〉が《国語表現Ⅰ》《国語総合》といった必修履修科目の中に部分的に挿入されることによって、〈現代語〉の学習内容は「選択」から「必修」へと逆に重要視されたということになるのである。

他方、実際に〈現代語〉を教育課程に位置付けている学校は非常に少ないという報告が見られる。

内外から「言語の教育」の重要性が叫ばれながらも、〈現代語〉が開設されていないという現実を私たち国語科教育に携わる者は重く受け取らなければならないであろう。

本稿では、高等学校国語科教員に対する調査注4に基づき、〈現代語〉の履修の実態をさぐり、なぜ〈現代語〉が開設されないのかという理由を明らかにし、〈現代語〉の視点から高等学校国語科における「言語の教育」の在り方を考察していきたい。注5

1. 先行調査

本調査の先行調査として管見によれば次の四つの調査がある。

- (1) 橋幸男「高等学校国語科における話し方指導について」『研究紀要』98 兵庫県立教育研修所 1987. pp. 1-14.

① 調査方法 郵送調査法

- ② 調査対象 兵庫県立高等学校の国語科担当教諭
- ③ 調査期日 1986（昭和61）年11月下旬～12月上旬
- ④ 回答の回収状況 合計146校（全日制普通科100，職業科23，定時制普通科23）

(2) 宮本克之「『現代語』はなぜ現場に浸透しないか」『日本語学』明治書院1997, 5. pp.12-21.

- ① 調査方法 集合調査法
- ② 調査対象 大阪府高等学校教育課程研究集会〔国語部会〕
- ③ 調査期日 1994（平成6）年8月19日
- ④ 回答の回収状況 合計231校（270校中 85.5%）

(3) 創拓社『日本語力に関するアンケート集計結果』1997.

- ① 調査方法 郵送調査法
- ② 調査対象 全国の高等学校
- ③ 調査期日 1996（平成8）年9月～10月
- ④ 回答の回収状況 合計140校（500校中 27.0%）

(4) 武井昭也「国語科教育の（高等学校）の課題点—北海道の現状と課題」第93回全国大学国語教育学会（自由研究発表）1997.

- ① 調査方法 郵送調査法
- ② 調査対象 北海道内公立私立高等学校
- ③ 調査期日 1997（平成9）年10月
- ④ 回答の回収状況 合計173校（342校中 50.6%）

2. 本調査の回答状況

1998（平成10）年1月8日，第35回北海道高等学校教育研究大会国語部会注6において，〈現代語〉に関する調査を行った。当日の調査の回答状況は，次の通りである。

出席者数… 285名 回答者数… 77名（27.0%）

回答者の「年齢層」は次の通りである。

20代…24名（31.2%） 30代…31名（40.3%） 40代…12名（15.6%）

50代…7名（9.1%） 無回答…3名（3.9%）

回答者の「大学での専門」は，次の通りである。注7

国文学・日本文学…46名（59.7%） 国語学・日本語学…12名（15.6%）

漢文学・中国文学…13名（16.9%） 国語科教育…3名（3.9%）

その他…3名（3.9%）

回答者の「全日制・定時制・通信制の別」は，次の通りである。

全日制…66名（85.7%） 定時制…8名（10.4%） 通信制…0名（0.0%）

無回答…3名（3.9%）

回答者の指導している「学科」の内訳は次の通りである。

普通科…70名（90.9%） 農業科…4名（5.2%） 工業科…5名（6.5%）

商業科… 5名 (6.5%) 家庭科… 3名 (3.9%) 英語科… 1名 (1.3%)

その他… 1名 (1.3%)

該当する学科全てに回答してもらったため、複数学科の重複が見られた。

本調査の方法その他に不備があったせい、回収率27.0%と芳しいものではなかった。一方で、不備があったにも関わらず回答が寄せられたと考えれば、〈現代語〉に対して興味のある層から回答が得られたということもできるであろう。注8

3. 〈現代語〉の開設状況

3.1. 本調査における〈現代語〉の開設状況

〈現代語〉の開設状況は、次の通りである。注9

現在開設している…16名 (20.8%) 開設予定である… 2名 (2.6%)

開設していた… 1名 (1.3%) 開設していない…58名 (75.3%)

この調査によれば、5校に1校の割合で〈現代語〉を開設していることになる。しかし、これらの数字を鵜呑みにすることはできない。それは、サンプルに偏りがあると考えられるからである。前述の通り、本調査には不備があったため、〈現代語〉に対して興味のある層から回答が多かったと思われるからである。

3.2. 〈現代語〉の開設状況の実際

本調査では、開設率20.7%という数字が得られたが、他の報告と比較して高い数字となっている。

同様の調査を宮本克之氏が行い、大阪府では、1994(平成6)年度231校中・13.9%という結果であったという報告がなされている。注10

北海道では、武井昭也氏が行い、1997(平成9)年度173校中21校・12.1%という結果であったという報告がなされている。注11

全国的規模の調査では、創拓社が行い、1996(平成8)年度140校中21校・15.0%という結果であったという報告がなされている。注12

また、明治書院の報告によれば、1997(平成9)年度大阪府では344校中49校・14.2%、1997(平成9)年度東京都では589校中49校・8.3%という結果であったという。注13

明治書院の調査は大阪府・東京都の全高等学校を対象としていることもあり、客観的な数字として見ることができる。

一方、郵送による調査である武井氏は回答率50.6%、創拓社は回答率28.0%と低く、本調査と同様、明治書院に比し、客観的数字とは言えない。これらの数字から類推すれば、〈現代語〉の開設率は10%前後というところであろう。

3.3. 教科書採択数から

前述の通り、国語科において〈現代語〉は選択科目であり、開設校の中でも7割は選択履修としてカリキュラムに位置付けているため、実際の数は開設率をかなり下回ると予想される。

教科書採択数から見ると、〈現代語〉の採択状況の低さが概観できる。

表1は、時事通信社の「高校教科書の採択状況」注14を一部修正しまとめたものである。注15

表 1. 教科書採択数から見た履修状況

	1996(平成8)年度	1997(平成9)年度	1998(平成10)年度	1999(平成11)年度
〈国語 I〉	1,659,750 ^冊 (100.0)%	1,604,250 ^冊 (100.0)%	1,577,850 ^冊 (100.0)%	1,567,800 ^冊 (100.0)%
〈国語 II〉	1,163,250 (70.0)	1,098,000 (68.4)	1,070,700 (67.8)	1,057,550 (67.4)
〈国語表現〉	227,000 (13.6)	217,700 (13.5)	209,400 (13.2)	207,400 (13.2)
〈現代文〉	1,336,300 (80.5)	1,299,200 (80.9)	1,230,900 (78.0)	1,228,600 (78.3)
〈現代語〉	89,000 (5.3)	80,300 (5.0)	75,300 (4.7)	68,500 (4.3)
〈古典 I〉	760,600 (45.8)	727,250 (45.3)	695,100 (44.0)	696,850 (44.4)
〈古典 II〉	543,650 (32.7)	521,650 (32.5)	497,200 (31.5)	484,450 (30.8)
〈古典講読〉	195,400 (11.7)	184,300 (11.4)	174,700 (11.0)	162,300 (10.3)
〈国語 I〉以外	259.6	257.0	250.2	248.7

この表を見ると、次のことが明らかになってくる。

- (1) 「〈国語 I〉以外」の選択科目は軒並み、減少している。1996(平成8)年度から1999(平成11)年度のわずか3年間で10.9ポイントのダウンである。これは、1学年10学級400名とした場合、約44人の生徒(約1学級分)が国語科を選択しなくなったという計算になる。
- (2) 〈国語表現〉〈現代語〉の履修率は極めて低い。1999(平成11)年度の数字を見ると、〈国語表現〉が13.2ポイント、〈現代語〉が4.3ポイントと極めて低い。これを、1学年10学級400名とした場合、〈国語表現〉では約53人、〈現代語〉では約17人がそれぞれ履修するという計算になる。更に、他科目も同様に減少傾向にあるため、今後とも増加は期待できない。
- (3) 〈現代語〉を履修する生徒は著しく減少している。1996(平成8)年度89,000冊あったものが1999(平成11)年度には68,500冊へと20,500冊減少している。これは、3年間で約四分の一の生徒が〈現代語〉から離れていった計算になる。

4. 〈現代語〉の履修について

4.1. 〈現代語〉の履修学年

〈現代語〉の履修学年は次の通りである。

2学年… 2名(12.5%) 3学年…14名(87.5%)

〈現代語〉の履修学年については、〈国語表現〉とともに特に規定はなく、〈国語 I〉との並行履修も認められている。しかし、〈現代語〉の履修は3学年に履修が集中しており、「〈国語 I〉の補完・発展」としてとらえていることがわかる。注16

同様の調査を宮本克之氏が1994(平成6)年度大阪府において行っている。結果は次の通りである。注17

1学年… 3校(10.0%) 2学年…10校(33.3%)

3学年…16校(53.3%) 2・3学年… 1校(3.3%)

本調査ほどではないものの、3学年での履修が最も多くなっている。

4.2. 〈現代語〉の履修形態

〈現代語〉の履修形態は、次の通りである。

必修… 5名 (31.2%) 選択…11名 (68.7%)

同様の調査を宮本克之氏・創拓社・武井昭也氏も行っているが、結果は次の通りである。注18

宮本克之氏 必修… 9校 (33.3%) 選択…21校 (66.6%)

創拓社 必修… 4校 (19.0%) 選択…14校 (66.7%) 無回答… 3校 (14.3%)

武井昭也氏 必修… 3校 (27.2%) 選択… 8校 (72.7%)

どの調査を見ても共通するように、選択履修が約7割を占めている。このことは、実際に〈現代語〉を履修している生徒数は、開設率よりかなり低いことを表している。

4.3. 〈現代語〉の履修学科

〈現代語〉の履修学科・課程は次の通りである。注19

学科 普通科…14名 (87.5%) 工業科… 2名 (12.5%) 家庭科… 1名 (6.2%)

課程 全日制…15名 (93.7%) 定時制… 1名 (6.2%) 通信制… 0名 (0.0%)

創拓社によれば、〈現代語〉の履修は「[難易度グループ別]で見るとCグループの設置率が高い」としている。注20

要するに進学に関係の薄い学校での設置率が高いということである。裏を返せば、進学に関係の深い学校には、入試科目にない〈現代語〉は設置されにくいことを示している。

5. 〈現代語〉が開設されない理由

5.1. 本調査に見る〈現代語〉が開設されない理由

〈現代語〉が開設されない理由について、順にあげていけば、次の通りである。注21

- (1) カリキュラム上の余裕がないから …45名 (73.7%)
- (2) 他の科目の授業の中に盛り込むことができるから …14名 (22.9%)
- (3) 入試科目でないため、生徒との関心と一致しにくいから …13名 (21.3%)
- (4) 指導資料が少なく、授業展開に不安があるから …12名 (19.6%)
- (5) 〈現代語〉の内容が扱いにくいから …10名 (16.3%)
- (6) 何をどのように教えてよいかわからないから …10名 (16.3%)
- (7) 〈現代語〉の教科書教材が扱いにくいから … 9名 (14.7%)
- (8) 系統的な学習の見通しが立てにくいから … 9名 (14.7%)
- (9) 〈現代語〉の内容が、特に必要と感じないから … 8名 (13.1%)
- (10) 評価が難しいから … 4名 (6.5%)
- (11) 内容が多岐にわたるため、習熟する期間が必要であるから … 2名 (3.2%)
- (12) その他 … 5名 (8.1%)

5.2. カリキュラムの問題

「開設しなかった理由」として四分之三の教員が、「カリキュラム上の余裕がないから」という理由をあげている。宮本克之氏は「カリキュラムの問題」によって、〈現代語〉が開設されない理由について詳述している。注22

以下、その内容を整理すると次のようになる。

- (1) 標準単位数から見れば、二単位の〈古典講読〉〈国語表現〉〈現代語〉の三科目が開設を巡って競合することになる。この際、〈現代語〉は入試科目にないため、小論文指導を目標にした〈国語表現〉を開設する方が、生徒の要求にもかなっていることから外される場合が多い。
- (2) 〈現代語〉と〈国語表現〉とでは、内容的に重なるところもあり、同時に開設するよりも、むしろこれまで通り〈国語表現〉の時間の中で、〈現代語〉の内容を含めた柔軟で多様な指導を考える向きが強い。
- (3) 学校五日制をひかえ、学校のスリム化、教育内容の精選が叫ばれている現在、新たな科目を開設することは他教科とのバランス上からも、かなり困難である。

宮本氏の考察から、「他の科目の授業の中に盛り込むことができるから」「入試科目でないため、生徒との関心と一致しにくいから」といった理由も「カリキュラムの問題」と密接に絡み合っていることがわかる。

「開設しなかった」理由を尋ねているのだから、どの項目も「カリキュラムの問題」と大なり小なり絡み合ってくるのは当然のことである。

5.3. 教員の意識の問題・教材の問題

「開設しなかった理由」の中で「カリキュラムの問題」の次に目立つ理由として「教員の意識の問題」と「教材の問題」があげられる。

教員は、〈現代語〉に対して興味を持っているのだろうか。

宮本氏の調査によれば、「『現代語』への興味」を尋ねたところ、次のような結果であったという報告がなされている。注23

とても興味がある	…16名 (6.9%)	まあまあ興味がある	…72名 (31.1%)
あまり興味がない	…42名 (18.1%)	全く興味がない	…3名 (1.2%)
無回答	…98名 (42.4%)		

宮本氏の調査は、第6次学習指導要領がスタートした1994(平成6)年度の調査であり、「『現代語』教科書の内容についても未見の指導者が多かった」注24にもかかわらず、4割近い教員が「とても興味がある」「まあまあ興味がある」と回答している。

本調査でも「〈現代語〉担当の有無」と「〈現代語〉への興味」を尋ねたところ、次のような結果が得られた。

〈現代語〉担当の有無

あ る	… 8名 (10.4%)	な い	…64名 (83.1%)	無回答	… 5名 (6.5%)
-----	--------------	-----	--------------	-----	-------------

〈現代語〉への興味

とても興味がある	…19名 (24.7%)	まあまあ興味がある	…42名 (54.5%)
あまり興味がない	…15名 (19.5%)	全く興味がない	…0名 (0.0%)
無回答	…1名 (1.3%)		

〈現代語〉担当経験のある教員が1割と少数である。開設率の現状から考えれば、この数字も当たり前のことかも知れない。

一方、〈現代語〉への興味については、約8割の教員が「とても興味がある」「まあまあ興味がある」と回答しているのである。

このことから、開設の有無にかかわらず、教員は〈現代語〉に対しての何らかの興味を持っていることが

うかがえる。

教員は、〈現代語〉に対して興味がなかったから、〈現代語〉を開設しなかったというわけではない。興味はあるのだが、実際に生徒に〈現代語〉を指導するには不安があるからこそ、積極的に開設できなかったのである。

「開設しなかった理由」として「授業資料が少なく、授業展開に不安があるから」「何をどのように教えてよいかわからないから」「教科書教材が扱いにくいから」「系統的な学習の見通しが立てにくいから」「評価が難しいから」といった回答はいずれも、〈現代語〉という科目の指導の難しさを示している。

文章読解については、数多くの実践・成果が発表されており、その指導法も多様である。また、優れた教材も多い。したがって、多様な生徒に対して、いろいろな角度からの指導が可能である。教員は安心して生徒を指導できるのである。

一方、〈現代語〉の学習内容は、文章読解に比して、実践も指導法も教材も貧弱であることは否めない。興味はあっても〈現代語〉に手が出ない状態なのである。

指導法もはっきりしない。教員が（生徒も）教材に対して興味が持てない状態で開設率が高くなるわけがないのである。注25

6. 〈現代語〉の内容について

6.1. 〈現代語〉の内容に対する教員の意識

宮本氏の調査に基づき注26、〈現代語〉の内容に、「一般意味論」の項目を設け、13項目に分類し、教員の指導にあたっての意識について回答していただいた。以下、結果を表2に示す。

表2 〈現代語〉の内容について 注27

	ア	イ	ウ
(1) 話し言葉、話し方	60名(77.9%)	20名(26.0%)	16名(20.8%)
(2) 討論、ディベート	38名(49.4%)	15名(19.5%)	40名(51.9%)
(3) 文章の構成、表記	36名(46.8%)	19名(24.7%)	8名(10.4%)
(4) 語句、語彙(慣用句)	28名(36.4%)	17名(22.1%)	3名(3.9%)
(5) 漢字(常用漢字)、漢語	26名(33.8%)	20名(26.0%)	3名(3.9%)
(6) 音韻、アクセント	8名(10.4%)	2名(2.6%)	20名(26.0%)
(7) 方言、共通語	6名(7.8%)	10名(13.0%)	14名(18.2%)
(8) (口語)文法	7名(9.1%)	6名(7.8%)	12名(15.6%)
(9) 現代語の成立、歩み	10名(13.0%)	6名(7.8%)	12名(15.6%)
(10) 現代語の特徴	15名(19.5%)	8名(10.4%)	7名(9.1%)
(11) 言語の役割、機能	25名(32.5%)	15名(19.5%)	13名(16.9%)
(12) 世界の中の日本語	11名(14.3%)	8名(10.4%)	20名(26.0%)
(13) 一般意味論	3名(3.9%)	7名(9.1%)	20名(26.0%)
(14) その他	2名(2.6%)	0名(0.0%)	1名(1.3%)
(15) なし	1名(1.3%)	26名(33.8%)	5名(6.5%)

6.2. 音声言語の指導について

「特に力を入れて指導する必要がある項目」として、「話し言葉、話し方」「討論、ディベート」などの音声言語の指導の必要性を指摘した回答が多い。音声言語を重視した〈現代語〉とも大きくかかわってくる。

一方、「指導しにくい項目」については、「話し言葉、話し方」「討論、ディベート」「音韻、アクセント」といった音声言語に関する項目が多い。

更に、「話し言葉・話し方」の必要性と実態を調査したところ、次のような結果となった。

「話し言葉・話し方」の必要性

ぜひ必要である …53名 (68.8%)	少し必要である …23名 (29.9%)
あまり必要でない… 0名 (0.0%)	全く必要でない… 1名 (1.3%)

「話し言葉・話し方」の実態

十分できている … 1名 (1.3%)	かなりできている … 0名 (0.0%)
あまりできていない…55名 (71.4%)	全くできていない …21名 (27.3%)

教員は、音声言語の指導の重要性を認識しながらも、実態としては「できていない」というのが現状である。注28

教員は、音声言語を指導したいと考えながらも、どのように指導していけばよいかわからない状態にあるのであろう。

6.3. [言語事項]の補完・発展・深化

「文章の構成、表記」「語句、語彙(慣用句)」「漢字(常用漢字)、漢語」といった文字表記も「特に力を入れて指導する必要がある項目」として高い数字をあげている。これらの項目は、我々が今まで[言語事項]として国語科の他科目でも実践してきた実績があり、「指導しにくい項目」の数字も低い。

これらは、小学校段階から継続的・螺旋的に取り上げられている項目であり、他に比べれば評価もしやすい。更に、これらは時間をかけることによって十分に成果を期待できる項目でもある。

〈現代語〉の内容の中でも教員にとっては最も扱いやすい項目と言えよう。

これらの項目を〈現代語〉の中心に据えることは、教員にとっては扱いやすいかも知れないが、扱い方を間違えれば、非常に特殊な授業になってしまう恐れがある。

例えば、日本漢字能力検定をはじめとする検定のためだけの授業となってしまうたり、就職試験対策の授業に陥ってしまう場合が考えられる。「〈現代語〉の授業＝ドリルの時間」に陥ってしまうことはないだろうか。

これらの項目を「取り立て」で指導を行うことも大事であるが、系統的・段階的に指導していき生徒に力をつけさせることが本来の形であると考える。「ドリル」中心になってしまえば、それぞれの項目をばらばらに指導してしまう可能性が高くなるだろう。

6.4. ことばについての再認識

また、「現代語の成立、歩み」「現代語の特徴」「言語の役割、機能」「世界の中の日本語」といった〈現代語〉そのものの内容についても「特に力を入れて指導する必要がある項目」として高い数字をあげている。

一方で、「指導しにくい項目」の数字は高く、これも音声言語と同様の結果となっている。

「古典」と関連させ「ことば」を国語史的にみたり注29、「現代文」と関連させ「ことば」についての優れた読み物を読解したり、国語科という教科の枠にとどまらず外国語科と関連させ外国語との「ことばの切り取り方」の違いを考えたり、と多くの視点から「ことば」そのものを学習することが可能な項目とも言

えよう。生徒に「ことば」というものを再認識させる意味でもその意義は大きい。

更に、授業展開を考えていく上でも、「調査、報告、討論」主体とする学習活動主体のかなり幅広い授業を構築できる項目であると考ええる。

生徒の学習意欲を喚起させ、更にその範たる教材の発掘に力を入れれば、かなりの活性化が期待できるのではないだろうか。

6.5. 〈現代語〉の指導法の確立、優れた教材の発掘を

「興味があり、得意とする項目」については「なし」の回答が一番多い。

武井氏の報告にもあるように「国語学系などの文章表現や言語教育の領域を専門とする教員が少な」という現状注30を考えると、〈現代語〉の内容の指導法の確立・優れた教材の発掘は急務といえるだろう。

7. 〈現代語〉に関する意見

本調査の最後に〈現代語〉及び音声言語に関する意見を伺ったところ、率直な意見が多く寄せられた。そこには、〈現代語〉という1科目に対する意見だけでなく、広く国語科における「言語の教育」の課題・問題点・改善の方向性が記されている。以下、それらの意見を原文のまま列挙する。

(1) 科目としての問題

- 指導すべき事項や方法が、まだ確立されていないので、担当者は相当に苦勞している状況である。実践を集約し、研究・分析したものを教科書や指導資料として現場にフィードバックして欲しい。
- 〈国語表現〉の時と同じように、新しい科目を作ってはみたけれど、あとは現場におまかせで、発展できぬままの科目ではないでしょうか。大規模校では進学指導、小規模校では校務に忙しく、とても新科目を研究する余裕がないというのが正直なところです。
- 現代語と定義づけた上で教師が生徒に指導できる内容は限られている。いたずらに国語を細分化した内容では、生徒も戸惑うと思います。教師の認識以上に、生徒の意識は敏感である。

(2) テキスト(教科書)の問題・〈現代語〉の位置付け

- 教科書がつまらない。コミュニケーション学習として位置付けたいと考えています。
- 大学時代、現代語をかなり研究したが、発展途上の研究段階であるような気がする。高校生のレベルに合った現代語のテキスト等も易しいレベルがなかなかない。生徒のレベルということを考えると、教育困難校などの場合、果たして必要であるか考えてしまう。もし、教えるとすれば、限定して、就職に必要な程度の基礎的なことを教えたらいいいのか、と考えている。
- 最近の高校生においては、音声、文字にかかわらず、言語による適切な表現能力が乏しいと思われる。表現すべき自己がないわけではなく、適切な手段(方法)を持っていないだけである。「正しい国語を使つての、適確な自己表現の技法」を身につけるための学習は必要不可欠である。〈現代語〉という科目も、その方向で実施されるべきだと思う。(但し、〈国語表現〉との差別化がはっきりしなくなるが)

(3) 〈現代語〉が開設されない理由

- 国語の教員には、文学中心の人が多く、〈現代語〉のような科目はなかなか開設されないのではないだろうか。

- 香具師の口上など民間伝承における音声言語などを教えたいが、受験に必要なと言われるので、教科の中で採択できない。
- 社会人にふさわしい話し方を教えることの必要性を強く感じているし、〈現代語〉の可能性も考えている。ただ、教科書に不満足なものが多く、自主教材の選定・準備にもすごい時間や労力がかかってしまうのも難。わたし自身が、文法・言語に自身がないため、正直〈現代語〉を担当すると気が重くなる。又、3年生は〈現代語〉(2単位)〈表現〉(2単位)必修になっているが言語に対する興味がない生徒にこの二つは本当にやりづらい。

(4) 「音声言語」の指導について

- 音声については、国語表現に取り入れて、扱おうと考えていたものの、推薦、就職対策の作文・面接で手一杯というのが現状である。国語ⅠやⅡの中でその一部に触れて、(殆ど現代語という意識はなく)指導に代えていこうと考えている。
- 話し方についての評価というものが難しい面があると思います。英語のディクテーション(読み)のように、テープにとるというのもよい方法かもしれませんが、そこまで進んだ方法で授業を展開する自信もまだありません。また、ただ思いつきというレベルを脱していません。現代語の授業はあまり理論の伝達というところのみで考えず、やはり生活に根ざしたところですからすすめていくべきだと考えます。

(5) ディベートについて

- 競技としての debate には大いに疑問を感じます。debate の先に討論があるべきです。肝心なのは相手を論破することではなく、話し合いが成立すること、その話し合いの中から“より良い結論”を導き出すことのはずです。カリキュラムや進度の都合上、私本人はなかなか「音声言語」に関する取り組みにとりかかれずにおりますが、将来的には必ずやってみたいと考えております。
- 「討論、ディベート」の実施の際、技術的指導が中心になりがちであるが、それ以前の「話す」ということに対する日本人自体の意識構造をよく考えておかなければ、どれだけ技術を身に付けさせようとしても意味がないと考える。
- 現代語の中でディベートよりも話し合いをうまく進める方法が必要だと思います。対立するものをいかに妥協点を見つけ協調したものをつくりあげるかということが日本的であり、生徒も受け入れやすいものと考えます。
- ディベート…アメリカと同じ方法をそのまま導入することに疑問を感じる。私が経営者なら、ディベートが強すぎる人間は採らない。もっと勉強すべき。

(6) その他

- 子供たちの言語環境の変化を考えると、言語のナマな生態(実態)を理解し、活用して行く力を身につけさせる事は非常に重要度を増していると考えます。当然(マニュアルと言われるかも知れませんが)方法論が必要になってくると思われます。
- 話し言葉は一般的に「安定」の方向に向かっていると言われます。それはたとえ、まちがえた言葉でも起こっています。例えば「雰囲気」は、今の生徒達は「フンイキ」ではなく、「フィンキ」と読んでいます。実際に「フィンキ」の方が口に出して言い易いのです。「ら抜き言葉」にも同じことが言えると思います。「見られる」「食べられる」よりも「見れる」「食べれる」の方が言い易いのです。最近の生徒達の言葉が一般的に正しい日本語から乖離している理由はこれだけではないと思いますが、この

「言葉の安定」はかなり大きい問題だと思います。実際の日本語の変化は「安定」によるものですから、ですから話し言葉として正しい言葉はどのようなものなのか、という規範の許容範囲が非常に難しいと思います。いつかは「フインキ」「見れる」「食べれる」も正しい日本語になるでしょう。

これらの意見から、ここまで論じられなかった問題点を次のように抽出できる。

- ① 〈現代語〉の位置付けが不明確である。注31
- ② 教員はディベートに対して疑問を感じている。
- ③ 進学希望の生徒にとって、〈現代語〉の学習内容は受験に直接的に効果がない。
- ④ 生徒の言語生活と〈現代語〉の学習内容が乖離しており、生徒の興味・関心を喚起できない。

これらの問題点については、別の機会に考察を試みたい。

8. むすび

本調査により、なぜ〈現代語〉が開設されないか明らかになった。「言語の教育」の「シンボル」「旗手」として、内外から期待されて誕生したはずの〈現代語〉であったが、その状況は「晒し者の状態」であった。前述の通り、第7次学習指導要領では、〈現代語〉という科目はなくなるが、〈現代語〉の学習内容は、選択必修となる2科目（《国語表現Ⅰ》《国語総合》）の中に継承されることとなっている。

わずか5%弱の履修率しかなかった「晒し者」の選択科目〈現代語〉の内容は、高校生であればだれもが学習する内容へと重要視されるに至ったのである。

このことをコンピュータにたとえれば、これでハードは整備されたことになる。あとは、〈現代語〉ソフトの整備と、コンピュータを実際に動かす人間が必要なだけなのである。

〈現代語〉ソフトの実践・成果を整備しなければ、いくら科目の中に〈現代語〉の学習内容を位置付けても、ソフトの充実した方に教員が流れていくのは当然のことである。

21世紀の高等学校国語科における「言語の教育」が活性化されるか否かは、〈現代語〉がいかに実践され、いかに成果をあげるかにかかっているのである。

注

- 1 本稿では、第6次学習指導要領国語科の科目を〈現代語〉のように表記している。それは、一般的な「現代語」の意味と、科目としての〈現代語〉では、著しくその意味が異なるからである。〈現代語〉に準じて、科目の名称については〈国語Ⅰ〉〈国語表現〉のように〈 〉で括った。
- 2 「現代語の理念と方法」『月刊国語教育』東京法令出版 1989, 5. p.66.
- 3 本稿では、第7次学習指導要領国語科の科目を《国語表現Ⅰ》のように表記している。第6次学習指導要領国語科の科目と明確に区別するため、便宜上〈 〉で括った。
- 4 調査票については、〈資料〉を参照されたい。
- 5 拙稿「〈現代語〉から見た『言語の教育』」『月刊国語教育』東京法令出版 1999, 8. pp.92-95. において同様のテーマで〈現代語〉の開設状況について概説的に分析している。
- 6 「高等学校の各教科などに関する事項を研究し、会員相互の研修と識見の向上につとめ、高等学校教育の振興を図る」ことを目的とした研究集会。北海道内の高等学校国語科教員全体の研究会はこの集会のみである。国語部会のテーマは「『不易と交流』—ことばの力を響かせるには—」。会場は北海道経済センター。

7 「その他」には、合計7名が回答した。その中で次の回答は「その他」の項目に回答していたが、内容が他の項目と隣接していると考え、次の項目に繰り入れた。

「生成文法」「言語学」各1 →「国語学・日本語学」

「中国哲学」1 →「漢文学・中国文学」

「中学校教員養成課程国語」1 →「国語科教育」

また、「その他」と回答した残り3名の内訳は、教育学2名、ロシア文学1名であった。

8 調査についての先生方への依頼・回答方法の説明は部会開始直前に行った。当日は天候不良(大雪)であり、会場に到着している教員も多くはなかった。アンケートの存在を知らない教員もいれば、回答が不十分なものも多く見られた。

9 「開設予定である」「開設していた」の回答の年度は次の通りである。

開設予定である → 平成10年度 …1 平成11年度 …1

開設していた → 平成7年度まで…1

10 「『現代語』はなぜ現場に浸透しないのか」『日本語学』明治書院 1997, 5. p.13.

11 「国語科教育(高等学校)の課題点ー北海道の現状と課題点ー」第93回全国大学国語教育学会(自由研究発表資料) 1997. p.3.

12 『日本語力に関するアンケート集計結果』 1997. pp.25-26.

13 「グラフで見る学校現場の現代語」『日本語学』明治書院 1997, 5. p.9.

14 時事通信社「96年度使用高校教科書の採択状況ー時事通信社調査(上)」『内外教育』時事通信社 1995,12, 8. pp.8-10.

時事通信社「97年度使用高校教科書の採択状況ー時事通信社調査(上)」『内外教育』時事通信社 1996,12, 6. pp.3-5.

時事通信社「98年度使用高校教科書の採択状況ー時事通信社調査(上)」『内外教育』時事通信社 1997,12,19. pp.9-11.

時事通信社「99年度使用高校教科書の採択状況ー時事通信社調査(上)」『内外教育』時事通信社 1998,12,25. pp.10-14.

15 〈国語Ⅰ〉〈国語Ⅱ〉〈現代文〉〈古典Ⅰ〉〈古典Ⅱ〉には二分冊の教科書があり、二分冊の延べ冊数で集計されている。そこで二分冊の教科書の冊数については二分の一の冊数として修正し計算したものである。

また、()内は〈国語Ⅰ〉を100とした場合の比率である。生徒数の減少とともに各科目の教科書の冊数も減少の一途をたどっている。国語科では、〈国語Ⅰ〉のみが必修であり、高校生全員が履修しなければならない。そこで、〈国語Ⅰ〉を基本にすれば、各科目の全体に対しての履修率に近い数字が表れると考えたからである。

更に、高等学校においては第6次学習指導要領が1994(平成6)年度よりスタートし、3学年までそろるのが1996(平成8)年度である。そんなことから、国語科の各科目の推移を見るのに適していると考え、1996(平成8)年度からの状況を表にまとめている。

16 市原菊雄氏は、〈現代語〉の履修学年について、自分の考えを次のように述べている。

おそらく、第1学年か第2学年において『国語Ⅰ』や『国語Ⅱ』『現代文』などと組み合わせて2単位の履修とするのが一般ではないかと思われる。

<「国語科の組織」『改訂高等学校学習指導要領の展開・国語科編』北川茂治・市原菊雄編 明治図書 1990 p.101.>

17 注10 p.13.

18 注10 p.13. 注11 p.3. 注12 p.25.

19 「学科」については、「普通科」と「家庭科」が1名重複している。

20 「難易度別グループ」は「入学時の難易度」により、A・B・Cの3つの段階に分けている。それぞれの偏差値は次の通りである。

A = 65以上, B = 50以上65未満, C = 50未満

<注12 pp.25-26.>

21 「その他」の理由は、次の通りである。

新任ですので詳しく聞いておりません。／わかりません。／生徒のレベルにあうような教材がない。／教科書が難しすぎる。

22 注10 pp.16-17.

23 注10 p.16.

24 注10 p.15.

25 野田光子氏は国語科の授業が「読解学習中心」とならざるを得ない理由を次のように述べている。

文学部出身の教官によって文学の読みの方法を教授された国語教師が、文学作品を中心に読みの指導をする。高等学校の国語教室は四〇名を一斉に指導することを期待された空間である。評論文や国語表現の実践の蓄積は浅く、文学作品の実践の蓄積の比ではない。これだけの条件がそろえば、「読解学習中心」「文学的文章中心」「教師主導型」の授業になるのは必定である。授業は毎日やらなければならない。教材発掘から始めなければならない。生徒参加型授業の、準

備や事後指導している余裕などどこにもないのである。

〈『『生きる力』としての国語教育・高校』『日本語学』明治書院 1999, 7. p.59.〉

26 注10 p.14.

27 表中の「ア」「イ」「ウ」は、それぞれ次の項目を示す。

ア…「特に力を入れて指導する必要がある項目」

イ…「興味があり、得意とする項目」

ウ…「指導しにくい項目」

また、「その他」の項目には、次のような記述があった。

ア…わからない。／敬語法。

ウ…学校全体の教職員の問題（含板書）

28 同様の調査を橘幸男氏が兵庫県立の全高等学校（国語科担当教員）を対象にして行っている。結果は次の通りである。

「話し言葉・話し方」の必要性

ぜひ必要である …52校（35.6%） 少し必要である …85校（58.2%）

あまり必要でない… 9校（ 6.1%） 全く必要でない … 0校（ 0.0%）

「話し言葉・話し方」の実態

十分できている … 0校（ 0.0%） かなりできている … 5校（ 3.4%）

あまりできていない…115校（70.1%） 全くできていない … 26校（17.8%）

12年前の調査ではあるが、現状は変わっていないことがわかる。

〈「高等学校国語科における話し方指導について」『研究紀要』98 兵庫県立教育研修所 1987. pp.2-3.〉

29 町田守弘氏は、『国語表現Ⅰ』において、〈現代語〉に関わる「古典」と関連させた具体的な教材や授業のイメージを提示している。

〈『『国語表現』で古典を扱う』『高校国語教育』三省堂 1998, 12. pp.3-6.〉

30 注11 p.13.

31 川本信幹氏も同様の見解を次のように述べている。

旧『国語表現』『現代語』は大きな理想をもって開設された科目であったが、残念ながら適切な位置付けがなされなかったために、ほとんど晒し者の状態で改訂期を迎えてしまった。

〈「問われる指導者の力量—『国語表現Ⅰ・Ⅱ』を晒し者にするな』『月刊国語教育』東京法令出版 1999, 7. p.33.〉

附 記

本稿は、佐野比呂己が1999年1月11日に北海道教育大学大学院教育学研究科に提出した学位論文（修士）「高等学校国語科における『言語の教育』の現状と課題」の一部に加筆・修正したものを、比良輝夫が校閲したものである。

本稿は、平成10年度科学研究費補助金（奨励研究B 課題番号10902001 研究課題名「高等学校における『言語の教育』の在り方についての分析・考察」）を受けて行った研究の成果である。

（北海道釧路工業高等学校・教諭）

（本学釧路校・教授）

1999年8月27日提出

＜資料＞ 〈現代語〉に関するアンケート

1998-01-08

I 現状についてお伺いします。

- ① 年齢 () 歳
- ② 先生の大学でのご専門をお答え下さい。
(1)国文学・日本文学 (2)国語学・日本語学 (3)漢文学・中国文学 (4)国語科教育 (5)その他 ()
- ③ 学科 (該当する学科全てに○をつけて下さい)
(1)普通科 (2)農学科 (3)工業科 (4)商業科 (5)水産科 (6)家庭科 (7)総合科 (8)英語科 (9)理数科 (10)看護科 (11)その他 ()
- ④ 全日制・定時制・通信制の別 (1)全日制 (2)定時制 (3)通信制

II “現代語”の開設状況についてお伺いします。

- ① 勤務校では〈現代語〉は開設されていますか。
(1)現在、開設している (2)開設予定である (平成 年度から)
(3)開設していた (平成 年度まで) (4)開設していない
- ② 〈現代語〉を担当したことがありますか。(1)ある (2)ない
- ③ ①で(2)(3)(4)とお答えになった方のみお答えください(開設しなかった理由であてはまるものを全て選んで下さい)。
(1)カリキュラム上の余裕がないから。
(2)〈現代語〉の内容が扱いにくいから。
(3)他の科目の授業の中に盛り込むことができるから。
(4)何をどのよう教えてよいかわからないから。
(5)入試科目でないため、生徒の関心と一致しにくいから。
(6)指導資料が少なく、授業展開に不安があるから。
(7)〈現代語〉の教科書教材が扱いにくいから。
(8)〈現代語〉の内容が、特に必要と感ぜないから。
(9)内容が多岐にわたるため、習熟する期間が必要であるから。
(10)系統的な学習の見通しが立てにくいから。
(11)評価が難しいから。
(12)その他 ()
- ④ ①で(1)(2)(3)とお答えになった方のみお答えください(〈現代語〉を開設された年度を全てお答え下さい)。
(1)平成6年度 (2)平成7年度 (3)平成8年度 (4)平成9年度 (5)平成10年度 (6)平成11年度
- ⑤ ①で(1)とお答えになった方のみお答えください(〈現代語〉を開設している学年、選択・必修の別、履修人数(概数)をお答え下さい)。
(1・2・3・4)学年に(必修・選択)で()人が履修している。

III 〈現代語〉の内容について、先生ご自身のお立場からお答え下さい。

- ① 〈現代語〉の内容について
(1)とても興味がある (2)まあまあ興味がある (3)あまり興味がない
(4)全く興味がない
- ② 〈現代語〉を指導する場合、特に力を入れて指導する必要があるとお考えのものを全て選んで下さい。ない場合は「なし」に○をつけて下さい。
(1)話し言葉、話し方 (2)討論、ディベート (3)文章の構成、表記
(4)語句、語彙(慣用句) (5)漢字(常用漢字)、漢語 (6)音韻、アクセント
(7)方言、共通語 (8)(口語)文法 (9)現代語の成立、歩み (10)現代語の特徴
(11)言語の役割、機能 (12)世界の中の日本語 (13)一般意味論 (14)その他 (15)なし
- ③ 〈現代語〉を指導する場合、興味があり、得意とする項目を全て選んで下さい。ない場合は「なし」に○をつけて下さい。
(1)話し言葉、話し方 (2)討論、ディベート (3)文章の構成、表記
(4)語句、語彙(慣用句) (5)漢字(常用漢字)、漢語 (6)音韻、アクセント
(7)方言、共通語 (8)(口語)文法 (9)現代語の成立、歩み (10)現代語の特徴
(11)言語の役割、機能 (12)世界の中の日本語 (13)一般意味論 (14)その他 (15)なし
- ④ 〈現代語〉を指導する場合、特に指導しにくいと思われる項目を全て選んで下さい。ない場合は「なし」に○をつけて下さい。
(1)話し言葉、話し方 (2)討論、ディベート (3)文章の構成、表記
(4)語句、語彙(慣用句) (5)漢字(常用漢字)、漢語 (6)音韻、アクセント
(7)方言、共通語 (8)(口語)文法 (9)現代語の成立、歩み (10)現代語の特徴
(11)言語の役割、機能 (12)世界の中の日本語 (13)一般意味論 (14)その他 (15)なし
- ⑤ 高等学校国語科では「話し言葉・話し方」の指導は必要だと思いますか。
(1)ぜひ必要である (2)少し必要である
(3)あまり必要でない (4)全く必要でない
- ⑥ 指導内容、指導時数から判断して、国語科における「話し言葉・話し方」の指導はどの程度できていると思いますか。
(1)十分できている (2)かなりできている
(3)あまりできていない (4)全くできていない
- ⑦ 〈現代語〉、「音声言語」に関する率直なご意見をお聞かせ下さい。

ありがとうございました。